

## 指導資料の解説 アメリカと日本の友情を深める花

### 伊丹市東野でつくられた桜の苗木

この読み物資料は、このたび実施される「伊丹市のハナミズキ植樹」にかかわって、小学校の高学年での学習資料、取り分け、「小学校・道徳の時間」の読み物資料として作成したものです。現行の『小学校学習指導要領・道徳』の目標は、「進んで平和的な国際社会に貢献できる主体性のある日本人の育成」にあります。

また、第5・6学年での、指導の内容項目4－(8)では、「外国の人々や文化を大切にする心を持ち、日本人としての自覚を持って世界の人々と親善につとめる。」ことがうたわれています。国際化への対応は、今後の教育にとって大きな課題ですが、まず、外国の人々や異文化にたいする理解と尊敬の念が重視されなければなりません各国には、その国独自の文化と伝統があり、各国民は、それに対して誇りを持ち、大切にしています。

このことを、わが国の文化や伝統に対する尊敬の念とあわせて理解させることが必要となつてきます。また、単に、国際理解に留まることなく、日本人としての自覚をもって積極的に外国人と接したり、交流の場に参加するなどして、国際親善に参加しようとすることも大切です。そして、さらに人類愛まで深めることも求められるでしょう。現行の学習指導要領を編纂するにあたっては、その柱の1つに「国際理解を深める教育実践」が強く打ち出されました。

そのための「国際交流の場」をもつこと、「外国語教育の充実」も大切な教育であります。同時に、その背景には「我が国の文化」の理解なくしては十分な成果が上がらないものだともいえます。具体的な小学校の「国際理解の教育」をすすめていく観点としては、「文化の異なった相手の立場を尊重し、世界の人々の人権と平和に貢献できるような、国際社会に生きる人間としての感覚をもった児童を育てる」ことも大切でしょう。

幸いにも本市には、日本とアメリカ合衆国との間に、国際交流の大きな事例があります。

現在、ワシントンDCの『ポトマック河畔の桜の並木道』は、桜の名所として有名ですが、1900年代の初め、当時の東京市長だった尾崎行雄が、ワシントンDCに寄贈した3000本の苗木が、今、豪華な風景を作りだしているのです。

さて、その寄贈の「苗木」の出荷にあたって選ばれたのが、現伊丹市（新田中野村東野）の「桜の苗木」だったのです。

当時、桜の苗木を育てている優秀な園芸家は、全国にも（埼玉県安行・兵庫県山本・福岡県田主丸など）あまたあったでしょうが、その中でも品質が高く、一カ月の船便にも耐え、しかも、病原菌のまったくない苗を、1万数千本揃えられるという条件は、園芸技術の高さと精進がないかぎり実現できないことでした。

伊丹市の人々は、農事試験場の指導を受け、苦労の末に、それを見事にやつてのけたのです。

この時、アメリカのほうは、日本へのお返しに「ハナミズキ」の苗を送ってきたのですが、日本でのハナミズキの生育は芳しくなく、近年やっと成熟してきたので、今回、その10本が、伊丹市に寄贈されることになったのです。

外国産の苗木をそだてるのは、厳しい条件に耐える苗であることと、それを育てた園芸関係者の

誠意と精進と努力があつて初めて実を結ぶものです。

日米間の交流（この場合、タフト大統領と尾崎東京市長との交流）の表の華やかな話の裏には、影になってそれを支えた伊丹市の人々の誠意と努力、高度な園芸技術を確立して初めて成就したことを、伊丹市の市民・児童・生徒に理解していただき、ひいては、「国際理解とは、市民の心と文化の理解の上に成り立つもの」であることを考える資料になれば、との思いで書き下ろしたものです。

ワシントンDCのリンカーン記念館から、オハイオ・ドライブという自動車道路に沿って東ポトマック公園を歩くと、タイダル・ベイスンというポトマック川のいわゆる水たまりである大きな池にでます。このベイスンの周囲に植えられているのが、日本から贈られた3000本の桜。

花が咲く4月ごろになると、ベイスンの周りをあたかもピンクのネックレスのように彩り、近頃の日本では見られない花盛りの豪華な風景が楽しめます。

このころ、ワシントンDCは、マグノリアの花も大きな花卉をほころばせ、各建物や記念館の周りの花壇にも花がいっぱい盛られ、一年中で一番美しい時期を迎えます。

ワシントンDCの桜は、1907年、来日したタフト陸軍長官が、日本から80本の苗木を輸入して植えたのが始まり。その後1909年、当時の尾崎東京市長が、タフト大統領夫人や高峰たちの願いや友情を受けて、2000本の苗木を寄贈しましたが、害虫のため焼却してしまったので、1912年に再度伊丹市東野に依頼した6000本を（3000本はワシントンDCへ、3000本は、ニューヨークのハドソン河公園へ）贈ったのが今日にいたっています。品種は、ソメイヨシノ1300本、ほか10種ほど（御車還・白雪・関山・有明・上香・御衣黄・一様・普賢象・福祿寿・滝香・駿河台香）でした。

東野村は、接ぎ木の台木苗一万数千本をつくり、清水市の興津農事試験場へ送りました。台木苗と一緒に、4種類の穂木（関山・普賢象・奥都・不明）も送られています。

東京荒川堤からは、江北桜の穂木12種類がきました。この当時、アメリカから日本へは、ハナミズキの苗を40本贈りましたが、わが国では、日比谷公園・東大付属植物園・園芸高校・農水省果樹試験場興津園芸部ほか何カ所かに分けて植えられたといえます。

東野村へも2本来ましたが、残念なことに枯らしてしまいました。今回の伊丹市の植樹式は、都立園芸高校のハナミズキの原木から採った実から育てた苗木のうちの10本を植樹します。

ハナミズキは、一名、アメリカヤマボウシと呼ばれています。ハナミズキの花は、5月ごろ、紅色あるいは白色の大変美しい花をつけます。4枚の総包につつまれて、中心にまるい花穂がありますが、小さい花が20個ほど集まってついています。

ハナミズキの種は、9月ごろ、まだ実が色づかないうちに苗床にまくとよく発芽します。

物語の構成上の観点は、次の通りです。

国際交流の基礎は、相手（外国の人々）の文化を尊重し、よいものは自分たちの生活にも生かして楽しむこと、また、その実現のための努力が必要であると思います。

生物学者のフェアチャイルドやマーラットは、「日本の桜」を育て、「花見」や「茶道」など「日本文化」を楽しんでいました。旅行作家のシドモアやタフト大統領夫人は、日本旅行中に、「日本の桜」の美しさに心を引かれてしまいました。

アメリカ在住の高峰譲吉も、日本の桜に心を引かれていました。こうした「日本の桜」をアメリ

カにも植えて広めたいと願う人たちの行動が一つになつて、東京の尾崎市長を動かしました。受け入れを引き受けた日本側も、日米の友情を深めるため、積極的に動き出しました。東京市側は、国の農事試験場の技官を派遣して、良質の桜の苗木づくりの技術開発と指導をしました。

東野村の人たちは、その指導を受けて、無菌の苗1万数千本を育て、出荷しました。

これを受けたアメリカ側は、友情の返礼としてハナミズキを日本に贈りました。

桜もハナミズキも順風満帆ではなかったのです。災害・戦争の危機を越え、友情を育む心や文化を尊重する精神に支えられて、現在に至っています。

今回、「ぐりんぷす」の計画は、かつての「日米の友情を深める花」の再認識と郷土の先人の功績・文化を偲ぶことをねらっているのです。

## アメリカと日本の友情を深める花

### 「伊丹市東野でつくられた桜の苗木」

#### 1. ワシントンの桜

むかし、アメリカの首都ワシントンにおくられた日本の桜が、いまでは、世界の名所の一つになっています。春になると、ポトマック公園の桜がはなやかに咲きほこり見わたすかぎりの桜なみきになります。

ポトマック川のほとりでは、散歩する二人づれや、花の下で家族づれが楽しそうに遊んでいます。愛犬をつれてくる人たちもいます。なかには外国の観光客もいます。どの人も明るく楽しそうにしています。

この時期には、「桜の女王」をえらんで、一週間も花祭りがおこなわれます。

ポトマック公園の桜は、明治の終わりごろにアメリカのタフト二十七代目大統領夫人のヘレン・タフトさん達の要望で、尾崎行雄東京市長がプレゼントしたものです。明治の終わりごろといえば、あなたのご両親のおじいさん・おばあさんが生まれていなかったか、子どものころです。

その時におくられた桜の苗木というのは、じつは、伊丹市の東野で育てた苗木なのです。そして、穂木は、東京荒川堤の江北の桜で、力を合わせてつくりました。

いまから約八十八年ほどふりかえって、桜を日本からアメリカにおくる時のようすを見ましょう。

#### ・桜に親しみを持った人たち

明治20年（1887）ごろ、アメリカから日本に来て、桜の美しさに心をうたれ日本の国に親しみを持った三人をあげてみましょう。

世界中の植物をあつめていたディビット・フェアチャイルド博士は、日本での旅行中、東京の荒川堤に咲いているいろいろな種類の桜の花の美しさに心をうたれました。そして、「このような美しい桜をアメリカへ輸入できないだろうか」と考えました

日本の桜をアメリカで育てて、花を咲かせるには、気候や土の性質がよく似ていなければなりません。

そこで、フェアチャイルド博士は、明治39年（1906）、ワシントンの近くのメリーランド州にある自分の庭園に、二十五種の日本の桜を植えて、育てることができるかどうかこころみました。

博士の庭園は、「森の中」とよばれていたほど静かなところでした。桜はみごとに育ち、花を咲かせました。

フェアチャイルド博士の友だちのチャールス・L・マーラット博士は、同じアメリカ合衆国農務省につとめていました。

マーラット博士は昆虫学者で、三十年間農務省の昆虫局長をつとめました。このながいつとめのあい間に、桜の木を自分の庭にうえました。

明治37年（1904）の春、フェアチャイルド博士とマーラット博士は、マーラット博士の庭園で、咲きほこる日本の桜の美しさに心をうばわれていました。

二人は、さっそく相談して、花見のお茶の会をひらくことをきめました。日本では、むかしから花見のときには、「野点」といってお茶の会をする習慣があります。日本に來たり、親しみを持っている人たちは、この催しに喜んで参加しました。

このお茶の会に招かれたお客の1人、エリザ・シドモアさんも、二人に輪をかけて桜の好きな人です。

シドモアさんは、有名な旅行作家で、明治24年（1891）には、それまで三回も日本に來て三年間過ごした日本のようすを「日本での人力車旅行」という本にあらわしました。

その本には、京都の御所の桜・奈良の古寺の桜・東京のお花見など、日本の各地の名所を紹介しています。

そして、シドモアさんは、日本の国のもっとも美しい花「サクラ」を自分の国の首都ワシントンに移し植えて、花をとおして大好きな日本人の心をアメリカ人に知らせたいと考えていました。

（桜の親日家、シドモアさんは、横浜外国人墓地に眠っています）

桜の花見のお茶の会で、三人の桜をとおした友情と、桜の木をワシントンに移し植える活動がはじまりました。

フェアチャイルド博士が、「庭園」に植えた桜が、美しく元気よく花をつけた明治42年（1909）、シドモアさんはこの桜をみるために、博士の庭園をおとずれました。そして嬉しそうにフェアチャイルド博士に話しかけました。

「私は、ずっと以前からワシントンの公園に日本の桜を移し植えたいと考え、公園関係者に話してきましたが、とりあってくれませんでした。今、庭園の桜の景色をみて、ワシントンの公園でも育つという確信がわいてきましたわ」「博士の庭園とワシントンとは、気候もおなじようですから、桜はきっと元気に育つでしょう」その日の午後には、三人はむちゅうで桜を植える相談をしました。そして、「ワシントン記念碑のそばの車道にそつて植えるのがよい」と話がまとまりました。

フェアチャイルド博士は、ワシントンの人たちに桜について知ってもらうために、まず小学校の児童からはじめました。

日本の植木業者から「しだれ彼岸桜」を取り寄せて、1年間苗床でそだてました。そのよく春に、ワシントンの小学校の児童を招き、各学校へ桜苗を1本ずつ持って帰り、学校の庭に植えるようにしました。

シドモアさんは、タフト大統領夫人のヘレン・タフトさんに会いました。そのころ、ヘレン・タフトさんは、ワシントンのポトマック川をうめたててつくる新しい公園に、どんな樹木を植えようかと考えているところでした。

シドモアさんは、桜についていままで考えていたことを話して、「その新しい公園には、ぜひ日本の桜を植えてください」とすすめました。

ヘレン・タフトさんも、日本の桜については、よい思い出がありました。二年まえに、陸軍長官だった夫と日本をおとずれたときに、上野公園に案内されて、山いちめん咲く「ソメイヨシノ」のあまりの美しさに心をうばわれたことを思い出していました。シドモアさんとヘレン・タフトさんの日本桜の思い出は、同じだったのです。

その日の二日あとに、ヘレン・タフトさんから「日本桜を買い入れて、すぐにでも植えましょう」という返事がきました。そして、さっそく桜の苗木を購入する計画がはじまりました。

アメリカの土地に桜を植えようとしていたのは、アメリカの人たちだけではありませんでした。ニューヨークのリバーサイド・ドライブに住んで「ニューヨークに桜の並木をつくらう」と市の公園委員会に呼びかけていたのは、高峰讓吉博士です。

高峰博士は、世界でも有名な科学者で、消化薬の「ジャスターゼ」やホルモンの「アドレナリン」を発明した人です。

博士の妻はアメリカの人で、アメリカに自分の会社と研究所を持って活躍し、日本とアメリカの親善につとめていました。

大統領夫人が、ポトマック川にそった公園に、桜苗を植える計画をしていることをニュースで知った博士は、すぐにこのことを東京市長の尾崎行雄につたえました。ニューヨーク駐在の水野総領事も、いそいで日本の外務省に知らせました。

#### ・ワシントンに桜苗をおくる

高峰博士からの手紙と、外務省からの知らせで、アメリカ大統領夫人が桜を植える計画をたてていることを知った尾崎東京市長は、日本とアメリカの友情をあらわすには、ねがってもないチャンスだと考えました。

明治42年（1909）、尾崎東京市長はさっそく準備をはじめました。

まず、東京市の議会で「桜の苗木2000本をワシントンにおくる」と決定しました。8月のはじめ、植木業者と契約をむすび、11月24日には送り出すことにしました。高さ三メートル、直径六センチメートルの桜の木2000本は、日本郵船の「加賀丸」に積み込まれて、11月24日、横浜を出航しました。

アメリカでは、タフト大統領夫妻が、東京市の申しでをこころよくうけいれ、桜の苗木をうけとる準備をととのえ、到着をまちました。

加賀丸は、12月10日にシアトルに着きました。そして、とくべつしたての冷蔵車で大陸を横断して、ワシントンに着きました。

ところが、思いがけないことがおこっていました。フェアチャイルド博士やマーラット昆虫局長らが、とどいた桜の苗木をしらべると、害虫が無数についており、病気にかかっていることがわかりました。桜の木についている害虫のことは、アメリカではまだ知られていませんでした。

(このような失敗は、桜の苗木といえないほどに大きく成長していたせいでした) このような害虫をアメリカの土地に入れることはできません。これほどたくさんの桜の苗木を消毒したり、殺菌する方法はありません。そうなれば、焼きすてるほか方法はありません。

#### ・ふたたび桜の苗木をおくる

ワシントンへおくった桜の苗木2000本が、すべて焼かれてしまったことを知ったタフト大統領夫妻や桜を植えようと努力した人たちは、どんなにか落胆されたことでしょう。

尾崎東京市長(現在、東京都)は、約束をはたすために、二どめの桜の苗木をおくることにしました。こんどは、注意ぶかく苗木づくりをしました。

まず、明治43年(1910)3月、農商務省農事試験場長の古在由直農学博士に、害虫の駆除の方法や苗木づくりの方法についてしらべるようたのみました。古在博士は、つぎのようにほうこくしました。

① 桜のカイガラムシは、ガスくんじょう法で駆除することができる。

しかし、スカシバの幼虫にはきかない。

② 苗木をつくる方法や苗木を選ぶときに注意すれば、病気や害虫が発生しない。しかし、ふつうの畑では、元気な苗を育てることができない。

あんぜんな方法は、苗を育てるよい畑をえらぶことである。

③ 桜の苗木は、1年間育てた元気なものをえらび、荷づくり前に

ガスくんじょうし、ゆそうちゅうに枯れないようにすることがか んじんである。

古在博士のほうこくを受けて、桜の苗木づくりがはじまりました。

博士は、農業について、日本でいちばんゆうめいな農事試験場興津園芸部の恩田部長に相談し、熊谷八十三技師を中心に桑名・堀技師が、苗木づくりにあたりました。

興津試験場の病気の菌がない場所をえらんで、苗木づくりをおこなうことにしました。

桜の苗木を良い木からたくさんふやすには、接ぎ木をします。

まず、根がよくつく元気な桜の木の枝を切り取って、それを土にさし木します。さし木した枝に根が出て、葉やみきの芽が出ると、それが台木になります。

一方、ほしいしゆるいの桜の木の枝を切り取って穂木をつくり、それを台木につぎます。

穂木は、東京の荒川堤の桜、船津静作翁が日本の各地からとりよせて植えて、丹精こめて世話をした江北桜からとることになりました。

台木づくりは、病気や害虫のおそれの少ない兵庫県の東野村（伊丹市東野）でおこなうことに決められました。

そのころ、兵庫県の南東部の地域（宝塚・伊丹・川西・池田）は、植木づくりのさかんなところでした。東野村もこの植木づくりのさかんな村の1つだったのです。

興津園芸部では、この台木に穂木を接ぎ木して育てることになりました。

#### ・東野村での台木づくり

明治43年1910年5月、兵庫県東野村の久保武兵衛さんあてに、農事試験場長の古在博士より「尾崎行雄東京市長が、アメリカ・ワシントンのポトマック公園に植える桜の苗木をおくられます。興津試験場で接ぎ木して育てたいが、病気や害虫のいない、元気な台木苗を1万5000本つくってください」という注文がありました東野村は、そのころ兵庫県川辺郡稲野村之内新田中野字東野とっていました。

東野村では、世界に門戸を開いた明治9年ごろから、果物の苗木づくりをはじめていました。ヨーロッパやアメリカでは、食後に果物を食べる習慣があることを知って日本の人びともそれにならうようになるだろうと考えて、はじめたということです。

この考えは、みごとにあたったのです。

和歌山県のうんしゅうみかん、千葉県のみかん、山口県萩のなつみかん、岡山県の桃、鳥取県の二十世紀なしなどの苗木は、すべて東野村でつくられたものです。

東野村の久保武兵衛さんのおうちでは、これらの苗木づくりをして、日本中の生産地へ送っていました。

古在博士のはなしを聞いた久保さんは、「日本の桜をアメリカへおくるおてつだいをさせてくださることは、私たちには大へん光栄です。こころをこめて元気な台木苗をつくりましょう」とへんじしました。

さっそく興津園芸部の恩田部長と桑名・熊谷・堀技師が東野村をおとずれ、台木苗づくりにとりかかりました。

そのころ、村では、「国のえらい役人さんが来られる」ということで、おおそうどうだったといえます。

村中の人たちや近くの村の人たちが、久保さんの家に集まりました。

恩田部長らの話を聞いて、村人たちは、「自分たちがつくった桜の苗木をアメリカへおくろう」と心にちかいあいました。

村人たちは、それまでに、いろいろな苗木づくりをしているので、接ぎ木の技術を身につけています。

自分たちがつくった桜の苗木が、ワシントンのポトマック公園で美しく咲くようすを頭にえがいていたことでしょう。村人たちは、各家にわけて、台木苗づくりにとりかかりました。台木苗は、桜の枝を切り取って、土に挿し木して、根や葉・くきの芽を出させるのです。それには、畑に植えてあるたくさんの桜の木のうち、いちばん根つきのよい「細葉桜」をえらびました。

15,000本もつくるのです。1本1本ていねいに植えて、世話をしなければなりませんので、東野村だけでなく、近くの村の人たちもてつだいました。

三人の技師は、今とはちがって、遠い東京からはるばる来るので、久保さんのおうちに四・五日とまることもありました。

今でも、そのために建てた茶室のようなはなれ座敷が残っています。

明治43年（1910）12月はじめ、三人の技師の指導でたんせいこめて育てられた台木苗は静岡県にある農商務省農事試験場興津園芸部へおくられました。

掘りおこした台木苗の根もとをワラでつつみ、コモ（むしろ）で台木苗をまきますそれを、ホリという水だまりにつけます。水からあげてから、ガスくんじょうしつに入れて消毒します。

ガスくんじょうしつは、桑名技師の工夫でつくられ、日本で最初につくられたものだといえます。村の神社の前につくられましたが、その後、村の苗木づくりに役だって、ますますさかんになりました。今、この場所は東野の公民館となっています。

ガスくんじょうしつには、一度に3000本入れることができました。

消毒がおわった台木苗は、しっかりと荷づくりして、一刻も早くということで東海道線の汽車（現在のJR）でおくられました。

おくるときには、八十人ほどの人たちがあつまって、作業をしました。各家で手分けしてつくられた台木苗は、久保さんの家の庭に集められました。台木苗を荷車に積んで、尼崎駅へむかうとき、村人たちのあいだから「ばんざい、ばんざい」の声があがったといえます。このとき、台木苗といっしょに、四種類の穂木もおくられました。

それから2ヵ月おいて、明治44年（1911）2月から興津園芸部に植えておいた台木苗と穂木苗で、接ぎ木がはじめられました。

十ヵ月後の十二月に、葉が落ちてから掘りおこし、消毒して、また、かり植えをしました。

そして、翌年の1月から2月にかけて、アメリカへおくるために掘りおこしました。

明治45年（1912）2月14日、横浜港より12種類の桜苗木6040本を積んだ「阿波丸」が出航しました。

桜苗木6040本のうち、半数はワシントンに、あとの半数は、高峰譲吉博士や日本人のきぼうで、ニューヨークのハドソン河開発100年記念式におくるためのものです。

1ヵ月たって、桜苗木は3月13日にワシントンにつきました。

農務省の人たちが検査をするために、にもつをひろげたところ、「すばらしいことだ、害虫のすがたが見えないぞ」「病気にかかっている木は、1本もないぞ」という声があがりました。昆虫局長のハワード博士も、「私は、今までに、このように完全な輸入植物を見たことがない」とおどろきました。

二週間後の明治45年（1912）3月27日に、ポトマック公園で植えつけ式をおこない、ヘレン・タフトさんと珍田日本大使夫人によって、まず最初の1本が植えられました。

#### ・その後のワシントンの桜

ワシントンのポトマック公園に植えられた桜は、接ぎ木してから1年のものですから、満開の桜の花をみるには、10年ほどかかります。

その間、公園を管理する人たちは、ていねいに世話をし、日本でみられるように花の雲をうかばせたような景色になるまでに育てあげました。

昭和2年（1927）、第1回の桜祭りがおこなわれました。

これには、イギリス・ドイツ・フランスなど20数カ国の大公使館の人びとや約1万人の観客が参加しました。4、500人の小中学生のおどりなどもあつて、せいでいにおこなわれました。桜祭りに参加したたくさんの児童たちや観客たちは、きっと、日本について親しみをもったことでしょう。

しかし、はなやかなワシントンの桜には受難のときもありました。

昭和3年（1928）、ワシントンが洪水におそわれました。ポトマック川の水位が上がって公園の桜は1ヵ月ちかくも、50センチほどの高さまで水びたしになりました。ワシントン市は、いつしょうけんめいに手をつくしましたが、約300本の桜が枯れてしまいました。でも、ポトマックの丘の「吉野桜」は、枯れなかったようです。昭和13年（1938）に、ポトマック公園に「ジェファースン記念館」を建てることになり358本の桜を切りたおすことになりました。

このころ、日本は中国にせめこんでいる時でもあつて、そのために、アメリカの人たちの日本への反感が高まっていました。「日本の桜は、ぜんぶ切り倒してしまえ」という人もいました。

桜の木は、植えてから二十七年もたっているのに、みごとな桜ばかりです。多くのワシントンの人びとは切り取ることに反対しました。

婦人団体の人たちは、桜の木のまわりに手をくんでいこうしました。そのために記念館建設に八十八本の桜が切りとられただけですみました。

##### 五. 桜のおかえしのハナミズキ

ワシントンのポトマック公園に、桜が植えられてから四年たつた大正4年（1915）に、桜の苗木をおくったお礼に、スウイングル博士がアメリカの代表として、ハナミズキの白い花の咲く苗木四十本を持って、日本に来られました。

ハナミズキの木は、アメリカではドッグウッド（犬の木）と呼ばれています。日本の人びとが桜を愛するように、アメリカの人びとに愛されている花です。ノースカロライナ州やバージニア州では、「州の花」とされています。

到着したハナミズキは、興津園芸部や東京の日比谷公園・羽根沢苗圃などに植えられました。

アメリカからハナミズキが日本に来たのは、このときがはじめてです。

二回目は大正6年（1917）に、フェアチャイルド博士から、べにいろの花が咲くハナミズキ13本と種子1ポンドが贈られてきました。

ハナミズキの苗木が二回に分けて贈られてきたのは、理由があったのです。

それは、初めに贈られたとき、日本人たちはこの花を好きになってくれるか分かりませんでした。そして、日本の土地で育つかどうかも分かりませんでした。

だから、桜の苗木のお礼に、アメリカの人たちに親しまれているハナミズキの苗木を、少しだけおみやげとして、もってきたのでしよう。

ハナミズキの花が日本の人たちに好かれ、日本の土地で育つことが分かったフェアチャイルド博士は、アメリカでもめずらしいべにいろの花が咲くハナミズキを贈ろうと考えました。

この花は、白い花が咲くハナミズキから改良された園芸品種です。

そして、べにいろの花の木を増やそうとして、種子から育てても、白い花にもどってしまいます。

そこで、桜の苗木を育てたように、白い花の台木に、べにいろの花の穂木を接ぎ木して増やさなければなりません。

二回目は、台木用に白花種の種子1ポンド、穂木用に紅花種十三本が贈られてきました。

これらの花は、たいへんめずらしかったので、花の咲くころになると日比谷公園にたくさんの方がみにきたといいます。

最近では、ハナミズキは、日本の各地にひろまって、わたしたちの近くでも見ることができます。

でも、桜のお礼におくられてきたハナミズキは、どうなったのでしょうか。

平成4年（1992）の桜祭りは、日本から桜がおくられてちょうど80年目になり「80周年記念行事」として、大へんせいでした。

なかでも大きな行事は、タフト大統領夫妻のお墓に桜を植える「80周年記念植樹式」でした。

植樹式に参加した人たちは、「アメリカの人たちにこれほど親しまれている桜は、ここにねむるタフト大統領夫人の、桜への愛情と熱意に、尾崎行雄東京市長がこたえたからだ」という気持ちをもっていたにちがいありません。

ワシントンの花祭りは、おおぜいのボランティアの努力で成功しました。この人たちのなかに、ひとりの日本人ボランティア・菅野光公さんがいました。

ある日、菅野さんは、親しいアメリカ人の委員に、「桜のお礼に日本におくられたハナミズキは、どうなったのでしょうか」と聞かれました。

それを聞いた菅野さんは、「初耳だよ。ほんとうなの？」とたいへんおどろきました。

菅野さんは、コンピューターを使ってしらべましたが、どこに植えられたかわかりません。

そこで、「尾崎行雄を全国に発信する会」の事務局長の峰与志彦さんに、手紙をかきました。

尾崎行雄は、明治・大正・昭和にわたって活躍した政治家です。大正のはじめに、立憲政治といって、国民が政治に参加する権利があることを記した憲法を護るために中心になってうんどうをおこないました。そして、国民が国民のための政治家を選ぶ普通選挙のうんどうをし、大正十四年に普通選挙法がしめされました。そのために、「憲政の父」と言われています。

「峰さん、ひとつ『尾崎行雄を全国に発信する会』のみなさんのお力で、このハナミズキがどうなっているのか、調査・解明していただけませんか。ワシントンっ子が日本

からの桜を、とちゅう戦争があったにもかかわらず、こんなにたいせつにしてくれていますのに」菅野さんの手紙を読んだ峰さんも、この手紙が重い歴史をひめていることにおどろきました。そして、さがしてみようと心にきめました。

「なんとしても、原木をさがしだそう。原木が生きていたら、日本人の良心が生きていたことになるではないか。日本人は信頼できる国民だと、若い人や子どもたちにつたえられるではないか。それから、峰さんのハナミズキの原木さがしがはじまりました。このハナミズキは、戦争中、敵の国「アメリカの花」としてうとまれ、切られたりもしましたが、なん本かの原木が切り取られることから守られて、美しい花を咲かせています。

峰さんは、会社の仕事をやめた後も、さらに熱心に原木さがしをつづけました。菅野さんに手紙でたのまれてから五年にわたる調査で、さがしだすことのできた原木のうち、「原木だと断定してもよい木」をまとめました。

○ 都立園芸高等学校（東京都世田谷区） 白 2本

○ 農水省果樹試験場・興津支場（静岡県清水市） 白 1本

○ 東京大学理学部付属植物園（東京都小石川） 白 1本

その他、「原木ではないかと思われた木」が六カ所、「原木ゆかりの地」というのが八カ所、「原木ゆかりの区や町」三カ所、あることをつきとめました。

そして、なお峰さんの調査はその後もつづけられ、このたび、伊丹も「原木ゆかりの地」となりました。また、福井県の「松平試農場」に五本贈られたが、農場が昭和31年に閉鎖され、原木もなくなっているようです。

・ハナミズキの原木から採った苗木を伊丹に

桜の苗木をおくるときに、台木つくりいきょうりよくした東野村にも、ハナミズキは二本おくられてきましたが、残念なことに二本とも枯れてしまいました。

そこで、この話を知った伊丹の郷土史を研究している人たちの集まった「ぐりんぷす」（中村慶子代表）というグループが、「伊丹から桜がえらばれ、おくられた歴史当時にかんけいした人びとのすばらしい事業をあきらかにするとともに、広く多くの人に知っていただくために、東京都にある原木から採った苗木を、伊丹市にもういちど植樹しよう」と計画しました。

国際交流・郷土史研究・文化遺産にもかかわる行事だから、伊丹市役所・伊丹市教委員会・伊丹市国際友好都市協会・伊丹市文化財保存協会・荻野小学校も計画に参加するようになりました。児童のみなさんも、この計画に参加すれば、きっとすばらしい行事になるでしょう。植えるばしょは、そうだんして十カ所ほどときめます。そして、植樹祭もおこないます。

平成10年4月、「ぐりんぷす」を代表して、森本啓一さん・久保武久さん・内堀睦夫さんが、峰さんの紹介でアメリカからおくられてきたハナミズキの原木のある東京都立園芸高等学校を訪問しました。

原木は、森のようにいろいろな木が植えられている植物園の中に、10メートルほどの高さで、枝をいっぱい広げ、花は満開でみごとに咲いています。

学校では、毎年学生の実習で、原木から採った実をまいて育てています。だから、年のちがう苗木がたくさん育っているのです。

校長先生や実習担当の先生は、「ぐりんぷす」の計画の話を聞いて、要望にこたえてくださいました。このハナミズキの輸送は、おなじ中野の中島農園が引き受けてくれることになりました。

こうした、皆の熱い思いが一つになって、また新しい物語がはじまろうとしています。

六. おわりに

わたしたちの先人たちが、国際親善にりっぱな功績を残されたことを、あらためて知っておどろいています。

明治のはじめ、外国の食文化に目をつけ、それがやがて、日本とアメリカの国際交流に大きな功績を残されることになっていったことは、伊丹市の大きなほこりだと思いません。先人の努力に学び、世界の人たちと仲よく交流できる世の中をつくることに、わたしたちもがんばっていきたいものです。

久保武兵衛さんの事業（功績）を継いでおられる、武久さんのお話では「わたしたちの先人が、こんなにもすごいことをしたことに、ほこりを感じます。東野村や近くの村々は、昔から、水が少なく、土地がやせていて、米づくりができにくい所ですけれども、先人たちは、工夫して、その土地を植木づくりに変えて、その技術を子孫につたえてくれました。だから、日本中で東野村がえらばれたのだと思います。

わたしたちも、先人たちのように、『なにか残したい』といつも考えています」と、誇りと情熱をもって話されていました。

発行 郷土史研究グループ ぐりんぷす  
兵庫県伊丹市中央4-4-1  
電 0727-84-3917

著者 内掘 睦夫